

# 日常解離体験尺度の開発過程と結果に関する実証的研究

福 島 恵\*

An empirical study about the development process of a new measurement scale for dissociation

Megumi FUKUSHIMA

## 要 旨

19世紀までの解離についての研究は臨床事例に基づいていたが、近年では解離を測定するための尺度作成も行われてきている。しかしそれら多くの尺度には、下位尺度の存在に関する確認が行われていないものがほとんどである。そこで本研究の目的は、解離が連続性を持つという観点から、正常解離だけでなく病理解離も含めた解離に関する尺度として『日常解離体験尺度』を作成し、その構造と信頼性を吟味することとした。また、尺度について須永（1996）の『非現実感尺度』、松下（2000）の『離人感尺度』、中村（2006）の『日常的解離尺度16項目版』の3つの尺度を参考に、最終的に全18項目となり、5段階評定で求めた。その結果、3つの因子を抽出することができ、それぞれ『自己・対象の存在に対する認識の欠如』、『心的機能不全』、『対象との連結に対する認識の欠如』と命名した。尺度の信頼性を行った結果、全体の $\alpha$ 係数は.948と高い信頼性を得ることができた。これにより、今回作成した日常解離体験尺度は信頼性があるという結果が得られた。

キーワード：尺度作成、正常解離、解離

## I 問題と目的

かつての精神医学において転換症状と解離症状を主とする精神疾患群をヒステリーと呼んだ。しかし、その語は古典ギリシャ語で『子宮』の意味を持つことから女性蔑視と結びついたり、差別的意味合いを含みすぎるために用いられなくなり、1980年には米国の診断基準からヒステリーという言葉が消え去った。その後米国の診断基準においてヒステリーは、それぞれ『解離性障害』、『転換型障害』、『演技性パーソナリティ障害』と名前が与えられた。本研究では、ヒステリーの1つであった解離性障害から存在が熟考されている『正常解離』に焦点を当てていきたい。まずは解離について、そして正常解離を測定するための尺度作成までの過程について検討していく。

## 1. 解離の定義

西村 (2001) が指摘しているように、解離については西洋医学においてトランスと関連した伝統が存在し、臨床症状の形で現れるだけでなく、癒しの行に誘発されて生じる変性や意識状態もある。解離の臨床的記載は19世紀の世には多数存在している。たとえば、19世紀における臨床家としてフランスの精神科医で心理学者であった Pierre Janet があげられる。Janet (1910) の臨床研究によって、解離への関心が劇的に高まったと考えられている。

解離とは、ある精神内容を切り離す事を意味するとJanetは考えていた。Janetのモデルは予期しない情動体験をすると、それまで保有していた心理的力の消耗を引き起こし、個々の人格に結びついている感情やイメージなどの諸現象が狭窄する事で、体験の一部が切り捨てられ、意識の解離が生じるとした。そして意識の解離が生じた事で低層の精神活動に陥り、統合の失調が意識下固定観念を生み、それがヒステリー症状へと導くとした。Janetは心理的外傷を解離の主な原因である、と述べた最初の人であるといえる (2006)。中井はJanetが初めて心理的外傷は解離の主な原因である、と定式化してからおよそ100年の時が過ぎた現代までに、多くの人が解離に魅了されている、と述べている。「解離」という言葉には、これまで非常に多くの機会に、多くの異なった角度からみた定義がなされてきた。精神科国際診断基準であるDSM- IVでは、解離を「意識、記憶、同一性、あるいは環境の知覚という日頃は統合されている機能の破綻」とされており、ICD-10では解離とは「自分自身の同一性、過去の記憶、直接的感覚、身体運動などの間の正常な統合が、部分的にあるいは完全に失われている状態」と定義している。この2つの基準、及び他の数多くの研究において解離を定義する上で一致する点とは、正常な統合機能の分断である、といえる (西村, 2001)。

## 2. 病理解離と正常解離

廣澤によれば1990年代の後半には解離性同一性障害が注目を集めていたが、2000年代に入り、日常生活において現代青年の中に解離的な物の見方の広がり指摘されている。いわゆる「病理解離」よりも日常場面における解離的な心理的機制である「正常解離」の方が多く目につくようになってきている (2010)。野口は、DSM- IVやICDに『機能の破綻』もしくは『正常な統合が失われている状態』と定義されているが、記されている全ての解離現象が病的なものではなく、非病者の日常生活の中に認める事が出来、人間の精神活動に必要なものであり解離現象コントロールする力は一種の能力とも言える、述べている (2007)。

このように解離には「病理解離」と「正常解離」が存在するが、この2つの解離の差は通常の解離機能が失調し、量的質的に重症化したものが病理解離、つまりは解離性障害になる、と西村は述べている (2006)。「病理解離」と「正常解離」両者の捉え方には、Janetによってある特有の患者のみに病理解離がみられると提唱された類型学的モデルと、正常なものから病的なものまで幅広く連続するという解離連続体モデルが存在する。前者の類型学的モデルは、病的解離者は正常人とは根本的に異なる人間集団である、という立場をとるものである。病的解離と正常解離が別個の型であり、病的解離はごく稀にしか体験しない体験を含むものであるとする。そして連続体モデルとは、解離を一つの連続体ととらえ、没頭のような些細な「正常」現象から、

逃走や多重人格障害のような「病的」状態にまで切れ目なく続いている、とする観点に立つ。つまり解離は解離体験と解離行動が正規分布をするスペクトルとして現れるという見解をとっている（田辺，1994）。解離のどのモデルの理論でも、この2つの観点のどちらかに属しているといえる。

### 3. 解離測定方法について

Roesler & McKenzie (1994) が指摘しているように、これまで多くの解離についての研究がおこなわれてきているが、現代の解離理論は基礎研究が基盤ではなく臨床事例に多くを担っている部分がある。

例えば、19世紀の世に解離への関心を高めたJanetを始めとして、解離の障壁を垂直なものとして見てさまざまに払拭された記憶へ即差にアクセスが出来るとするネオ解離理論を提唱したHillgard、そして第二次世界大戦後に関連が見出された解離とPTSDの関係などが挙げられる（2006、西村）。

しかしそんな中でも正常解離測定尺度についての研究も多くなってきているが、そのどれもいくつかの課題を残したものばかりである。例えば、Putnam & Bernstein (1986) は解離の連続体モデルの観点に立ち、それを測定する質問紙としてDES (Dissociative Experiences Scale、以下DES) を開発した。DESは信頼性・妥当性共に検討された最初の解離性体験を測定する尺度である。作成されてからDESは、最も多くの研究の中で使用されている。しかし、DESは現時点において単一因子として考えられ、下位因子の存在が確認されていない。その為、解離の水準として全項目の平均が用いられ、症状が見逃されてしまう可能性がある、と考えられている（小川・田辺，2001）。さらに、中村（2003）や、升田・中村（2005）によって日常的解離尺度が作成されているが、この尺度も下位因子の検討に関して曖昧な記述しかされていない（升田，2006）。従って、上述の問題を解決するために、新しい尺度を作成する必要性が感じられる。

そこで本研究は解離連続体モデルの観点から正常解離から病理解離までを1つの連続体としてとらえ、正常解離から病理解離までを含んだ新しい解離の尺度を作成し、その構造を吟味することを目的としている。本研究を行う際に、以下の方法を用いて調査を行った。

## II 方法

### 1. 『日常解離体験尺度』の作成過程

DSM-IVによれば、解離は現実感の喪失体験を内容として含んでいる。従って筆者は、須永（1996）の『非現実感尺度』、更に解離の下位因子として考えられている離人症について松下（2000）の『離人感尺度』、そして中村（2006）の『日常的解離尺度16項目版』の3つの尺度を参考にし、45項目からなる新しい尺度を作成した。尺度を作成する際に、まずは院生・教員と共に項目の内容検討を行った。そして尺度を用いて、解離症状が起きやすいといわれている（野口，2007）18～22歳の私立大学に通う1～4年生180人を対象にした研究を行った。

その結果、記入漏れなどの不十分なデータを含むケースを除いた168人の回答が得られ、回収率

は98%であった。その後回収された質問紙をSPSSによる主因子法、プロマックス回転を行い、共通性、因子行列の得点の低いものを削除し内容を検討した結果、全18項目の質問紙が完成した。須永の非現実感尺度からは『何かものを見ても、本当にそこに存在しているように感じられない時がある』などを含む8項目、松下の離人感尺度からは『体験を振り返ってもそれが自分の体験ではないような感じで、本当にあった事ではないような気がする時がある』などを含んだ5項目、そして中村の日常的解離尺度からは『集団の中にいるのに一人で寂しい感じがする時がある』などの7項目からなる尺度となった。このように各段階をへて、作成された尺度を『日常的解離体験尺度』と命名した。尺度の項目内容はTable.1に記されている。

Table 1. 『日常解離体験尺度』の内容

- 
- Q1. 離れたところから自分を見ている気がする時がある
  - Q2. 自分自身が現実には存在していないような奇妙な感じがする時がある
  - Q3. 他の人と話している時、相手が現実にそこにいるという感じがしない時がある
  - Q4. 風景や建物が幻みたいに見える時がある
  - Q5. 周囲と自分とが切り離されているような感じがする時がある
  - Q6. 自分が今まで親しんできた物が何となく疎遠に感じられる事がある
  - Q7. 誰かの隣にいても、その人の横にいるという感じがしない事がある
  - Q8. 今自分が話した事なのに、自分が言ったとは思えない事がある
  - Q9. 周りを見渡すと、まるで古い写真か映画を観ているような気分になる時がある
  - Q10. 言葉が自分の意思とは関係なく口から出る事がある
  - Q11. 自分が今まで親しんできた人がなんとなく疎遠に感じられる事がある
  - Q12. 人々が生きているように感じられない時がある
  - Q13. 人が何かをしているのを見ても動いているのが目に映るだけで、その人が生きているように感じられない時がある
  - Q14. 体験を振り返ってもそれが自分の体験ではないような感じで、本当にあった事ではないような気がする時がある
  - Q15. 特に睡眠不足や疲れがある訳でもないのに、頭が働かないような感じがする事がある
  - Q16. 話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある
  - Q17. 連想が全くわかなくなる時がある
  - Q18. 思った事や考えている事を言っている、本当にそんな事を思ったり考えたりしているのかよくわからなくなる時がある
- 

## 2. 尺度

前述したように、本研究において作成した『日常解離体験尺度』に関して、『非現実感尺度』、『離人感尺度』、『日常的解離尺度』から項目を厳選し、質問紙調査を行った結果、最終的に18項目の日常解離体験尺度が完成した。その項目としては解離性症状の特徴を取り入れたものとなった。

## 3. 手続き

私立大学の教養の講義前に新解離尺度をフェイスシートと共に100人に対して配布し、教示を行った。講義終了後に質問紙を回収し、記入漏れなどを除き結果60人の回答が得られた。回収率は60%

であった。その後SPSSによる主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。以下に日常解離体験尺度の結果を記す。

### Ⅲ 結果

本研究において用いた分析は、記述統計と尺度の信頼性、因子分析である。

#### 1. 記述統計の結果

まず、尺度の記述統計の結果はTable. 2に示されている。

Table. 2から分かるように、平均値が最も高かった項目は「話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある」である。また、平均値が最も低かったのは「他の人と話している時、相手が現実にもそこにいるという感じがしない時がある」である。

#### 2. 日常解離体験尺度の信頼性と因子分析

次に、日常解離体験尺度の信頼性に関して信頼性分析を行い、全体の $\alpha$ 係数は.940であったため、本尺度の信頼性は認められたと考える。

そして、日常解離体験尺度の因子構造を見るために、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。その結果として、Table. 3に示されているように、3つの因子が抽出された。

Table 2. 日常解離体験尺度の平均値

項目内容	平均値	標準偏差
Q1. 離れたところから自分を見ている気がする時がある	2.7305	1.32827
Q2. 自分自身が現実には存在していないような奇妙な感じがする時がある	2.5482	1.34641
Q3. 他の人と話している時、相手が現実にもそこにいるという感じがしない時がある	2.2515	1.19092
Q4. 風景や建物が幻みたいに見える時がある	2.3413	1.22608
Q5. 周囲と自分とが切り離されているような感じがする時がある	2.7605	1.31813
Q6. 自分が今まで親しんできた物が何となく疎遠に感じられる事がある	2.8204	1.29552
Q7. 誰かの隣にいても、その人の横にいるという感じがしない事がある	2.5422	1.23388
Q8. 今自分が話した事なのに、自分が言ったとは思えない事がある	2.9880	1.27529
Q9. 周りを見渡すと、まるで古い写真か映画を観ているような気分になる時がある	2.3114	1.18174
Q10. 言葉が自分の意思とは関係なく口から出る事がある	2.9401	1.32037
Q11. 自分が今まで親しんできた人がなんとなく疎遠に感じられる事がある	3.1018	1.32007
Q12. 人々が生きているように感じられない時がある	2.3434	1.28528
Q13. 人が何かをしているのを見て動いているのが目に映るだけで、その人が生きているように感じられない時がある	2.2096	1.18134
Q14. 体験を振り返ってもそれが自分の体験ではないような感じで、本当にあった事ではないような気がする時がある	2.7605	1.26686
Q15. 特に睡眠不足や疲れがある訳でもないのに、頭が動かないような感じがする事がある	3.4910	1.28414
Q16. 話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある	3.5988	1.18250
Q17. 連想が全くわかなくなる時がある	2.9401	1.20591
Q18. 思った事や考えている事を言っても、本当にそんな事を思ったり考えたりしているのかよくわからなくなる時がある	3.4146	1.30079

Table 3. 日常解離体験尺度の、信頼性、因子構造

日常解離体験尺度 ( $\alpha=.940$ ) 18項目	因子構造		
第1因子 自己・対象の存在に対する認識の欠如 ( $\alpha=.911$ )	1	2	3
Q3. 他の人と話している時、相手が現実にはそこにいるという感じがしない時がある	0.837	0.007	-0.064
Q2. 自分自身が現実には存在していないような奇妙な感じがする時がある	0.729	0.047	0.046
Q13. 人が何かをしているのを見ても動いているのが目に映るだけで、その人が生きてるように感じられない時がある	0.727	-0.001	0.008
Q12. 人々が生きてるように感じられない時がある	0.716	0.018	0.047
Q5. 風景や建物が幻みたいに見える時がある	0.715	0.017	0.037
Q9. 周りを見渡すと、まるで古い写真か映画を観ているような気分になる時がある	0.677	0.030	0.021
Q1. 離れたところから自分を見ている気がする時がある	0.632	-0.026	0.139
Q14. 体験を振り返ってもそれが自分の体験ではないような感じで、本当にあった事ではないような気がする時がある	0.416	0.255	0.160
第2因子 心的機能不全 ( $\alpha=.857$ )			
Q16. 話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある	-0.113	0.908	0.014
Q18. 思った事や考えている事を言っても、本当にそんな事を思ったり考えたりしているのかよくわからなくなる時がある	0.163	0.703	-0.138
Q15. 特に睡眠不足や疲れがある訳でもないのに、頭が働かないような感じがする事がある	-0.100	0.698	0.186
Q17. 連想が全くわかなくなる時がある	0.195	0.631	-0.142
Q8. 今自分が話した事なのに、自分が言ったとは思えない事がある	0.115	0.369	0.269
第3因子 対象との連結に対する認識の欠如 ( $\alpha=.856$ )			
Q7. 誰かの隣にいても、その人の横にいるという感じがしない事がある	0.030	-0.033	0.794
Q6. 自分が今まで親しんできた物が何となく疎遠に感じられる事がある	0.161	-0.113	0.707
Q11. 自分が今まで親しんできた人が何となく疎遠に感じられる事がある	0.057	0.070	0.629
Q10. 言葉が自分の意思とは関係なく口から出る事がある	-0.097	0.361	0.522
Q5. 周囲と自分とが切り離されているような感じがする時がある	0.373	-0.040	0.493

日常解離体験尺度の因子分析を行った結果、抽出された因子を構成する項目から判断して、まず第1因子においては、「他の人と話している時、相手が現実にはそこにいるという感じがしない時がある」、「風景や建物が幻みたいに見える時がある」などの項目が含まれる事から、自分や対象の存在への認識が薄い傾向が考えられる事から、＜自己・対象の存在に対する認識の欠如＞と命名した。次に、第2因子において、「話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある」、「特に睡眠不足や疲れがある訳でもないのに、頭が働かないような感じがする事がある」、「言葉が自分の意志とは関係なく口から出る事がある」などの項目が含まれる事から、心的機能が健康的な形で機能していない可能性が考えられる事から＜心的機能不全＞と命名した。最後に第3因子においては、「周囲と自分とが切り離されているような感じがする時がある」、「自分が今まで親しんできた物が何となく疎遠に感じられる事がある」などの項目が含まれる事から、自分と対象との間の繋がりの薄さが考えられ、＜対象との連結に対する認識の欠如＞と命名した。このように3つの因子それぞれを＜自己・対象の存在に対する認識の欠如＞＜心的機能不全＞＜対象との連結に対する認識の欠如＞とした。

#### IV 考察

既述しているように、本研究の目的は、既存の解離を測定する尺度（須永（1996）、松下（2000）、中村（2006））を参考にし、正常解離だけでなく病理的解離の側面を含む新しい解離の尺度を作成し、その信頼性及び構造を吟味することである。19世紀までの解離に関する研究のほとんどは、臨床事例に基づいていたが、近年では、解離に関する実証的研究が行われるようになったのは、多

くの解離尺度が作成されたからである。しかしこれらの尺度の多くには、問題があった。即ち、下位尺度の存在の有無に関する確認がほとんど行われていなかったということである。つまり、解離にはさまざまな側面があるにも関わらず、ほとんどの尺度は単一因子によって構成されていた。

そこで本研究では、解離の両側面（病理と非病理）を考慮に入れ、新しい解離尺度を作成し、『日常解離体験尺度』と命名した。信頼性分析の結果から分かるように、日常解離体験尺度には非常に高い信頼性が見出された。尺度の構造に関しては、因子分析の結果が示しているように、『自己・対象の存在に対する認識の欠如』、『心的機能不全』、『対象との連結に対する認識の欠如』という3つの因子が抽出された。それぞれの因子の内容に関しては、第1因子は、自分や対象の存在に関する意識の薄さ、第2因子は心的機能不全、第3因子は自分と対象との薄い繋がりに関するものである。以上の結果から、解離には少なくとも3つの要素が含まれていると言える。

さらに、日常解離体験尺度の各項目の平均値から見れば、平均が3.0以上の項目は、「話を聞いていても、言葉が耳を通り過ぎていくように感じる時がある（Q16）」、「思った事や考えている事を言っても、本当にそんな事を思ったり考えたりしているのかよく分からなくなる時がある（Q18）」、「特に睡眠不足や疲れがある訳でもないのに、頭が働かないような感じがする事がある（Q15）」、「自分が今まで親しんできた人が何となく疎遠に感じられる事がある（Q11）」である。内容から見れば、Q15以外の項目は対人関係的な場面に関するものであり、比較的日常的な体験を描いているといえる。

一方、平均の3.0以下の項目は「今自分が話した事なのに、自分が言ったとは思えない事がある（Q8）」のような比較的病的な要素に関するものである。もし学生が非病的な区分に属していると仮定するならば、この結果は当然であると考えられる。さらにこの結果から得られる示唆としては、本尺度には病的な対象と、非病的な対象を見分ける力があると考えられる。しかし、このようなことをいえるためには更なる分析が必要である。

本研究の問題として、調査対象者の人数である。対象者の人数とその特性（学生のみを対象にしていること）である。従って、これから対象の人数を増やし、学生だけではなく臨床群も対象にし、調査を行う必要があると考えられる。

また、平均の高い項目のほとんどは、対人関係場面に関係しているという結果から見れば、解離は対象の対人関係の性質や、あるいはBion (1961) やHafsi (2006, 2010) の言う『原子価構造』となんらかの関係があると考えられる。従って今度は、このような関係を明らかにするために、研究を行いたいと考えている。

### <付記>

本論文を作成するにあたり、一方ならぬご指導を賜りました奈良大学Med Hafsi教授に心より感謝いたします。また本研究にご協力いただいた奈良大学の大学院生、学部生の皆さまに心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

- ・廣澤愛子. (2010). 「解離」に関する臨床心理学的考察—「病理解離」から「正常解離」まで—. 福井大学教育実践研究 第35号
- ・Janet, P. (1910). *Les Nervoses*. Ernest Flammarion, Paris. (高橋徹, 訳. (1974). *Janet神経症*, 医学書院, 東京)
- ・升田亮太, 中村俊哉. (2005). 日常的解離尺度 (短縮6項目版), 日常的分割投影尺度 (短縮8項目版) の構成概念妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, 第13巻, 第2号, 208-219
- ・升田亮太. (2006). 日常的解離尺度 (短縮版) における弁別的妥当性と項目内容の検討—分割投影, 離人感との関連性について—. *九州大学大学院人間環境学府*, Vol. 7
- ・中村俊哉. (2003). 解離と分割についての覚書—日常的な解離尺度, 空想対話尺度, 日常的な分割投影尺度の作成—. *福岡教育大学*, 第52号, 213-226
- ・野口寿一. (2007). 自己関係性の視点から見た解離. *京都大学大学院教育学研究科紀要*, 第53号
- ・西村良二. (2006). 解離性障害. *新現代精神医学文庫*, 株式会社新興医学出版社
- ・Putnam, F. W. (1997). *Dissociation in children and adolescents: A developmental perspective*. Guilford Press. (中井久夫, 訳. (2001). *解離：若年期における病理と治療*, みすず書房)
- ・Roesler, T. A., & Nancy McKenzie, R. N. (1994). Effects of Childhood trauma on Psychological functioning in adults sexually abused as children. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 182, 145-150
- ・柴山雅俊. (2007). 解離性障害——「うしろに誰かいる」の精神病理. *ちくま新書*, 株式会社精興社.
- ・田辺肇. (1994). 解離性体験と心的外傷体験との関連—日本語版DES (Dissociative Experiences Scale) の構成概念妥当性の検討—. *催眠学研究*, 39 (2), 1-10
- ・田辺肇, 小川俊樹 (1992) 質問紙による解離性体験の測定—大学生を対象としたDES (dissociative experience scale) の検討—. *筑波大学心理学研究*, 14, 171-178.